

追悼

日本国憲法草案に男女平等を書いたベアテ・シロタ・ゴードンさん  
(2012年12月30日逝去)

2001年1月1日

民 医 運 新 聞

ベアテ・シロタ・ゴードンさんは5歳から15歳まで日本で育ち、アメリカの大学に入学。在学中に日米が開戦、高橋の安否も十分知ることができない状態に置かれました。1945年、「日本に行けば両親に会える」との思いでGHQ民政局に就職後、日本国憲法の草案作成にあたり、人権小委員会のメンバーに抜擢されました。波瀾万丈の人生を生き、日本国憲法に「男女平等」を書いたベアテさん。憲法を変えようとする動きがよまると、「日本国憲法を守ろう」と話すベアテさんに、その思いを話してもらいました。

樋口 人権小委員会のメンバーに三歳で任命された時はどんな気持ちでしたか？  
ベアテ びっくりしました。でも命令ですから考える暇もなかった。「あなたは女性ですから女性の権利を」ということになったときはすごく喜びました。  
樋口 ベアテさんは男女平等を強調しましたが、当時としては画期的でしたね。  
ベアテ 私はママに「経済的な理由で男性と結婚するのは良くない。教育をたくさん受け、良い職業に」と言われて育ちました。また私は五歳のときから日本で育ち、日本の女性の状態をずいぶん見ました。好きな人と結婚できないこと、家において子どもの世話をし、食事をつくる。夫が友だちと帰ればサービスし、自分とは会話に入らない。女性に権利がないことを知っていました。  
樋口 男女平等をめぐったベアテさんの意見は、憲法の第二四条にも反映しています。採用されませんでした。妊婦と乳児を持つ女性の公的援助もとりあげましたね。  
ベアテ アメリカの憲法にはありませんが、ヨーロッパの憲法に女性の社会福祉のことがずいぶん書いてありました。だから私は「これは日本のために良いのでは」と。そして日本の官僚的な男性が民法を書くことになるから、そういう権利が憲法に入っていないければと思ったのです。  
ジェームズ三木さんは日本国憲法起草をテーマにした劇「真珠の首飾り」を書いた人で、良いことを言いました。「スタッフは世界の憲法の良いところを集めようとした。日本国憲法の本当の作者は歴史の英知

だ」。そのとおりです。  
樋口 「ご自身も差別を受けた体験があるのですか？」  
ベアテ ええ。「タイム」誌にいたとき、女性は記事を書く仕事はできず、リサーナだけ。それはおかしいと思いました。  
アメリカへ帰って仕事を探したときも差別されました。勤めたかった会社は「あなたは夫がいる」と雇いませんでした。  
樋口 女性が働くことは大変だったんですね。  
ベアテ 良い仕事に就くのは難しかったです。今もアメリカでは給料が違います。男性が「ドルなら女性も七五セントです」。  
樋口 そうなのですか？  
アメリカはレイディーファーストの国と聞いていたが。それと、お子さんをかかえて働くことは大変だったでしょう。どう乗りこえたのですか？  
ベアテ ジャパン・ソサエティという文化交流の財団に勤めていた時、一週間に二、三回事務所へ行き、他の仕事を家でした。子どもがいてもうまくいったのは、夫もずいぶん手伝ってくれたから。夫は自営業で、時間の都合が良かったので、私がいなくても子どもを見て、それでもずいぶんベビーシッターにお金を払いました。アメリカでも税金からは出ないので、社会がもっと援助しなければ。いろいろな事務所のおかげに保育園をつくり、ランチも一緒にママと子どもができれば良いと思います。  
樋口 ベアテさんは著書「一九四五年のクリスマス」(柏書房)の最後で、仕事でアジアやヨーロッパなどいろいろな国をまわった経験から「どの国の女性も思っていることは同じ。子どもを産み育てること、子どもの将来を考えたとき、どんな女性も平和を切望している。世界中の女性が手をつなげば平和な世の中になるはず」と書かれています。

55年前 「男女平等」を記したベアテさんは語る

きき手：樋口みな子編集委員

私も元気づけられました。何か女性へのメッセージは。  
ベアテ 平和への道を開くのは女性だと思います。基本的には子どもを産むとき、平和かどうか気にするから。だから女性は平和のために運動をしなければ。日本だけでなく全世界のために。そうでないと子どもや孫が楽しく生活できないです。  
平和は大切です。日本に平和憲法があることはすばらしい。平和憲法を改正するのではなく、他の国ぐに宣伝すべきです。他の国ぐに憲法を改正した方が良いでしょう。また日本の経済が発展したのは、武器をつくらず軍にお金をあまり使わず、テクノロジーや教育などに使ったからです。  
樋口 そうですね。  
ベアテ また、女性は男性に「女性が産んでなければ男性も幸せにならない」と説明しなければ。今の日本では男性は毎日仕事で、女性は家で子どもの世話をします。しかし子どもが大人になっても子どもとだけいたら、女性は教養をのばせないし、運動に参加できない。男性も仕事をリタイヤしたとき、女性と会話にならないのではないですか？男性も家庭で色いろしたら良い。子育ても良い。男性も喜ぶと思います。  
私の夫はたぶん私よりも孫のことを喜んでいました。「私たちの孫はすこい。きれいで賢くて」とって孫のことばかり話します。私が「孫を持つ人はみんなそう言います」と言くと「あの人は嘘をつく。私が言うのは本当です」と言っています(笑)。  
樋口 今日はありがとうございました。



フォト 片瀬 典子

日本の憲法

生みの親は歴史の英知

「ゴードン」  
一九三三年、オーストリア・ウィーン生まれ。父が東京音楽学校 現在の東京芸術大学 教授として招かれ一九三九年、五月、三十九年アメリカの大学に準拠博士、のちアメリカ国籍取得。リサーチャーを退職し、第二次世界大戦終了(四五年)後、GHQ民政局に就職。同年末に再渡日。四六年二月、憲法草案作成にあたり人権小委員会のメンバーに。六カ国語に通じた才能を生かしてヨーロッパ諸国の憲法も参考にしたが、男女平等、学問の自由について起草した。